

(戦国策—齊策、注)

といった義がある。前節に述べた「片岡」「片山」の解釈を裏づける重要な漢字義である。「かた野」も、国都から隔たった国境にある野の義であった。ただし、交野というところは、

河内交野國に禁野と云所あり、天子の御狩の地也、よのつねの殺生を禁制せらる、故禁野と云也

(貞丈雜記)

といわれるごとく、「禁野」という特別の性格を後代担うことになった。

なお、「交野」という表記については、

交は交迭の字義に假る迭古訓カタミ

(大日本地名辞書—河内國北河内郡「交野郡」の項)

という説が知られているが、迂遠な説明の憾をまぬがれない。むしろ

按ずるに日本紀ニ交ノ字を加天と訓む……即混和之義、人名ニ和ノ字を加都と讀む、亦同じ、

(和名抄—國郡部—西海郡—筑前國)

(日本地理志料—卷三—河内國—交野郡)

という指摘を正解とすべきである。「交」カテ+野↓カタ野」といった表記がありえたことは、

宗像 牟奈加多

(同—尾張國—中島郡)

茜部 阿加奈倍

(同—讚岐國—多度郡)

生野 伊加乃

(同—尾張國—中島郡)

のような例を見ても推測しうるところである。ただし、「かた」に「片」「方」「傍」「肩」といった一般的な文字が使用されず、あえて例外的な「交野」という表記が行われたのは、あるいは上乗述べた「郊」の義を酌んでいたかとも思われる。郊祀の行われる禁野の義をおわせるために「郊」の基本義を表わす音

符「交」の字を用いたとも考えられるのである。

六 おわりに

以上、掲題三語について、その原義、またその用例として掲げた諸歌・諸譚における意味を中心に論じた。辺境、国境に近いということが、これらの語の核義であった。「片山」は「あしひきの」という枕詞を必ず伴う語であったが、「片岡」については、「しな照る」という枕詞を伴ったものが一例ある。この枕詞の由来については、古来諸説があるが、定説を見ない。これについては、別稿にゆずりたい。

abstract

On *Katawoka*, *Katayama* and *Katano*

by Hori Katsuhiro

The words *Katawoka*, *Katayama* and *Katano* appear as place names in old Japanese literature. Various interpretations of the original meanings of these words have been presented, but there is currently no established consensus. In this article I consider examples of the usage of these words from a lexicological point of view and conclude that the prefix *Kata* in these three words means “remote” or “provincial.” When we interpret these words in this way, it enables us to better understand the literary passages in which they are used.

(平成16年10月29日原稿受理 大阪産業大学教養部)

(和名抄—人倫部—乞盜類)

に見るように、貧しい賤民であつたと考へるべきである。推古紀片岡遊行譚の「飢者」は、日本靈異記では、

皇太子居住于鵜岡本宮時、有縁出宮遊觀幸行。片岡村之路側有毛乞、人、得病而臥。太子見之、從轡下、俱語之問訊、脫所著衣、覆於病人而幸行也。……有臣白曰「觸於賤人而穢衣、何乏更著之。」……

(日本靈異記—上卷—第四—「聖德皇太子示異表縁」)のように「乞勺人」となっており、それを「はつきり」と「賤人」と記している。万葉「乞食者詠」の「あしひきのこの片山」は、そのような卑賤の身分を名のる者の謙退の表現であつたと見るべきである。

五 「交野」について

「片山」「片岡」を以上のような意味に解する上で、今一つ参考すべき語は

庚子、車駕幸交野。

(光仁統紀—寛龜二年二月)

太上天皇遊獵于交野。

(日本紀略—天長二年十月)

……狩はねむごろにもせで、酒を飲みつつやまと歌にかかれけり。いま狩する交野の渚の家、その院の櫻ことにおもしろし。……この酒を飲みてむとて、よき所を求めゆくに、天の河といふ所にいたりぬ。親王にむまの頭、大御酒まいる。親王のたまひける。「交野を狩りて、天の河のほとりに至るを題にて、歌よみてさかづきはさせ」とのたまうければ、……

(伊勢物語—八十二段)

などに見える「交野」^{かたの}である。少なくとも「片岡」「片山」を含むこれら三語の「かた」は、同じ意味をもつものであつたはずである。通行辞書を見ると、

かたやま 一つだけぼつんと立っている山。
かたをか 孤立した丘。

(岩波古語辞典)

のように、山、岡については説明できても、同じ理屈で「交野」は説明できないものが多い。むしろ右引「交野」は固有名詞であるとしても、全国に「かたの」と称する地名は多く、もとは普通名詞であつた。上來述べた「かた」の意味をここに適用するならば、「かた野」とは、辺境の野ということになる。

祀天神於交野柏原。賽宿禰。

(桓武統紀—延暦四年十一月壬寅)

祀天神於交野。

(同—延暦六年十一月甲寅)

に見るごとく、交野は桓武天皇が郊祀の祭を行なつた場所として名高い。郊祀とは、天を祀る漢式祭事であり、

祭名。冬至祀天南郊、夏至祀地北郊、故謂祀天地、爲郊。

(字彙—「郊」の項)

といわれるように、十一月に行われたのは、冬至の祭である。その「郊」の字に、

邑外謂之郊、郊外謂之牧。

邑即國都矣。郊者說文云距國百里爲郊。

(爾雅—釋地、義疏)

軍於邯鄲之郊。

郊、境也。

ととして、「片岡」が推古紀一例、万葉一例、「片山」は右引「片山雉」の歌一例、顯宗紀一例、乞食者詠の二例ということになる。これらの「片」の意味は何か。双一雙の義でなかったとすれば、次に考えられるのは、傍・邊の義である。このうち傍の義は、冒頭所引顯宗紀「傍山」の表記もあつて注意されるが、「傍山」は語源義を忘れた後代の当て字と考えるべきである。書紀二例を見ると、ともに「巡行」「遊行」の際の詠作になつており、近傍の山と解するよりも、中央から離れた邊境の山と見るほうが文脈にかなうのである。すなわち「片岡(山)」とは、都から遠く隔たつた場所にある、人跡もまれな辺陲の「岡(山)」の義であつたと考えるのがもっとも自然である。いわば「カタツカタ」の「岡(山)」、「片田舎の岡(山)」ということである。そのように解してはじめて、冒頭所引諸歌の意味もいっそう鮮明になる。

まず日本書紀の二例について見ると、顯宗紀室壽詞が清寧天皇明石巡行の際、推古紀歌謡が聖德太子片岡遊行の際に詠じられたものという設定である。ともに、都からすれば、国境のほとり、ないしそれをも越えた辺陲の地であり、それが「傍山」「片岡山」という表現になつたと見るべきである。

片岡の此向峯に稚蒔かば今年の夏の陰に比らむか

(再引)

の「片岡」については、卒然と初句に措かれており、把握しがたいところがあるが、「稚蒔く」という農林の営為がいわれているところからして、都から遠く隔たつた田舎の山間地であることを示すために用いられた語であつたかと思われる。後代の

題しらず

山がつの片岡かけてしむる野の境に立てる玉のをやなぎ

(新古今集—雑中—一六七七、西行法師)

しづのをが片岡しめてすむやどをもてなすものは夕顔の花

(拾玉集—一六四八)

においても、「片岡」は「山がつ」「しづのを」の居所であつた。「あしひきの片山雉立ちゆかむ」の歌は先に見たとおりであるが、附言するならば、ここに「片山」が用いられたのは、防人に征く者送る者の出生地が、都から遠く離れた場所であることを示すという意味があつたと考えられる。

最後に、乞食者詠二首における「片山」については、聖地の義を読み取る向きもある(前記藤原論文)が、曲解というべきであり、単に邊境の地にある山という意味であつたにすぎない。邊境とは、端的にいえば中央部から最も離れた国境であり、「片山」とは、つまり国境の山ということでもあつた。そこは、異国に接する境界にある山であり、そこでは峠の神が祀られ、飯が盛られたであろう。だからこそ、神に飯を満置する義(森重敏『統上代特殊仮名音義』—「キ」〈廓〉の項)の枕詞「あしひきの」が四例すべてに冠せられたのである。

そこは、官人、里人にとつては異國との境界を示す重要な意味をもつ山であつたと同時に、居住・生活空間としてはなじまぬ場所であり、そこに住む者はわずかに「牡鹿」(顯宗紀室壽詞)のような動物の類か「乞食者」のような卑賤の者であつた。右に引いた「片岡」の例歌にも「山がつ」「しづのを」が詠みあわせられていた。「乞食者」については、宮廷に奉仕する芸能人のように見る向きもある(吉田由紀子「乞食者詠二首考」、「叙説」第二九号、平成十三年十二月)が、

乞兒 列士云齊有貧者常乞於城市。乞兒曰天下之辱莫過於

是。楊氏漢語抄乞索兒保加比、止今案乞索兒即乞兒是也和名加多井

引例の中には、「片山」のように、「片山」の下にさらに名詞を重ねる語構成のものもあり、その中には、「片山＋」でなく「片＋山」と見るほうがよさそうなものもあって、それらは「片山」の例からは除外すべきものとなる。たとえば、
子らが名に関けの宜しき朝妻の片山ぎしに霞たなびく

(再引)

における「片山ぎし」については、「片山＋ぎし」ではなく、「片＋山ぎし」の義と見るべきである。「山ぎし」とは、「河岸」「海岸」のように水辺の陸地をいうのでなく、山そのものがいわば「河岸」「海岸」のような断崖絶壁をなしている地形を表わす語であったと思われる。「高邊也」(説文)「高崖也」(廣韻)の義をもつ「崖」を「キシ」と訓む(名義抄)。「朝妻山」の片方が山岸になっており、そこに霞がたなびく、というのである。

悲緒未息更作歌五首

佐保山にたなびく霞見ること妹を思ひ出泣かぬ日はなし

(卷三―四七三、挽歌)

大伴宿祢坂上郎女歌一首

情ぐきものにぞありける春霞たなびく時に戀の繁きは

(卷八―一四五〇、春相聞)

寄霞

春霞山にたなびき鬱しく妹をあひ見て後戀ひむかも

(卷十一―一九〇九、春雜歌)

のように、「霞」は嘆きの心を象徴することが多く、当該歌も、叙景歌ではあるが、「朝妻」と「霞たなびく」との間に必ずや右引例に見るような恋にちなむ由縁が存したのであろう。単なる「山ぎし」といわず「片山ぎし」といったのも、「片」に、「片思ひ」の義をほのかに響かせたからではないかとさえ思われる。

わがかどの片山椿まことなれわが手ふれなな土に落ちむかも

(再引)

における「片山椿」は、「片山の椿」と解するのが通説になっているが、「我がかどの」を受けることが不可解であり(新日本古典文学大系『万葉集』、「家の表から真正面に見える(片山椿)」(新編日本古典文学全集『万葉集』)と解く説もあるが、無理な解といふべきである。「山海石櫛」(巻七―二六二)の語例もあることであり、ここはやはり「片＋山椿」と見るべきであろう。「片なる山椿」とは、いささか不明瞭ではあるが、防人に出かけた後、独りぼつんと家に残される椿を「片」で限定したかとも思われる。ただし、今一つの見方もできる。先に見た「片生ひ」の義で、植え付けたばかりでまだ成木になっていないものを「片＋山椿」といったかとも考えられる。そこに人事の意味を含ませ、うら若い少女の譬喩としたのかもしれない。あるいはその両義を含ませたと見ることもできよう。

あしひきの片山雉立ち往かむ君に後れてうつしけめやも

(再引)

における「片山雉」は、「山雉」なる語もなく、また冒頭乞食者詠の例に同じく枕詞「あしひきの」を受けていることからしても、「片山の雉」と解するべきである。ただし、この場合の「片」には、「片山」の義以外に、「雉」にも係っていく意味が含まれていたであろう。すなわち、当該歌は、右「片山椿」の歌同様「悲別」の歌であり、独り取り残される者の義にちなんで「片」をもって冠したと考えられるのである。上二句「雉」の序は、第三句「立ち往かむ」を導く以上の意味をなうものであった。以上三例中、前二例(「片山ぎし」「片山椿」)を除外するこ

不完全の義を尖鋭化させて派生した語彙である。不完全、未熟、中途半端といった意味になっている。

「片」の字は、名義抄にたびたび立項され、「カタハシ、カタハラ、カタへ、カタツカタ」などと訓まれている。このうち「カタハシ、カタハラ、カタツカタ」については、訓点語として使用された例が見える。使用例の多い「カタハラ」について見ると、

彼の大蛇頭カタハラニごとに各石松有り。兩の脇カタハラニ山有り。

(神代紀—上—一書第三)

猶失意醉へる如し。因て山下の泉の側カタハラニ居り、乃ち其の水を飲して醒めましぬ。

(景行紀—四十年是歲)

我が子小碓王、昔熊襲叛きし日、未だ捻角にも及ばぬに、久く征伐に煩ふ、既にして恒に左右カタハラニ在りて朕が及ばざるを補ふ。

(同右)

後聞忽院中有異香氣。非常郁烈。隣側カタハラニ並就觀無不稱嘆。

(金剛波若經集驗記)

のように、ほとり、そば、よこ、となり、わき、といった意味で用いられている。まん中に位置する事物から見て、左右いづれかにはずれた場所が「かたはら」である。名義抄にやはり「カタハラ、カタツカタ」と訓む字である「偏」に「中之両旁曰偏」(康熙字典)の義がある。

「かたはら」の側・隣・旁の義に対し、「かたはし」「かたつかた」は、中心に対する辺・端の義である。

或取竹木薄、片カタツカタ如小指面許。一頭カタツカタ纖細以剔斷牙。

(南海寄歸内法傳—卷第二)

若觸著狗犬亦須凜漱。其嘗食人應在一邊カタツカタ。

(同—卷第二)

はしっこ、かたすみ、の意味である。近傍ではなく、中央部から空間的、方位的に遠く離れた、一端、一辺を表わす。「二邊」の「邊」に「邊境也」(大廣益會玉篇)の義がある。

これはこの国の傍カタハラに住む白拍子にて候。

(謡曲—道成寺)

辺方 へんほうはくニノカタワラヲ云フコトハヂヤ

(交隣須知)

のごとく、後世「かたはら」にも同じ辺境の意味が生じた。「かたはら」の近傍—辺境の義は、いわゆる共義的対義と見ることができ。

むかしをとこありけり。片田舎カタノカにすみけり。をとこ、宮つかへしにとて、別れをしみてゆきけるままに、

(伊勢物語—二十四段)

昼はかたほとりに忍び、夜は洛中に入り、判官の御行方を尋ねけり。

(義経記—六)

などに例をみる「かたみなか」「かたほとり」も、中央から遠く離れた田舎、辺陬の義で、類例としうるものである。

四 「片岡」「片山」の本義

このように連体詞「かた」は諸義にわたるのであるが、冒頭に引いた「片岡」「片山」の意味は、上記のどれに相当するのであるうか。前述最初の意味を適用すれば、二個一対の山があつて、その一方を「片山(岡)」といったことがまず考えられるが、そのような文脈の明確な例はなく、採用しがたい。冒頭

と見て、それらの地名に寿福・神聖の義を読みとろうとする説もある（藤原泉「乞食者詠二首——『片山』を中心として」、『岡大國文論稿』十九、平成三年三月）が、この解義は冒頭金用例にあてはめられるものではなく、付会の憾をぬぐいえない。「片山」「片岡」は、現在でも全国に分布する地名であるが、本来は、「奥山」「高山」などと同じく、「山（岡）」の何らかの特徴に取意した普通名詞であったと見るべきであり、ただちに固有名詞と見るのは誤りである。その普通名詞としての意味を解明するには、前項の限定詞「片」の意味について、くわしく検討する必要がある。

三 連体詞「片」の意味

「片」という漢字は、「木の字の右半分」が原義の指事文字（廣漢和辭典）である。「片、判木也。从半木。左半爲片、右半爲片。」（六書正譌）という義注を見ても分かるように、本来左右二つあるものの、どちらか一つということを原義とする。和語「かた」も、二つで一つをなすものの半分、片一方ということを経験した点で変わりはない。「かた」の反意語は「ま」であるが、「片手」に対する「ま手」が「左右手」（巻十一—二三三七）「二手」（巻十一—二八二〇）などと表記された例が万葉集にある。左右二個一対の「ま」に対し、「かた」はその一つを欠いてどちらか一つだけしかないと表わす。そこからおのずと、二つあるべきものが一つしかないという、欠如・喪失の感が含意されたであろう。円満な男女一体の関係を喪失したことをなげく相聞歌に、「かた」がしばしば用いられるのも、その欠如の義を汲んでのことである。

門部王戀歌一首

飲宇の海の塩干の滴の片念ひに思ひやゆかむ道の永手を

（巻四—五三六、相聞）

問答

まけ長く夢にも見えず絶ゆるとも吾が片恋ひは止む時もな
し

（巻十一—二八二五）

相手が思う思わぬは知らず、反応・返事はなくとも、ひたすら一方的にこちらが相手を思うありようが「片念ひ」「片恋ひ」である。

寄風

泊瀬風かく吹くよひはいつまでか衣片敷き吾ひとり寝む

（巻十一—二二六一、秋相聞）

妹が袖別れし日より白妙の衣片敷き恋ひつつぞ寝る

（巻十一—二六〇八、正述心緒）

「衣片敷く」とは、本来なら二人がそれぞれ衣を敷きあうのであるが、相手がいないので自分の衣を一枚だけ敷く、相手の不在、喪失感、孤独感を象徴的によく表す語である。

このような「かた」の、二に対する一の義は、また一面、全に対する半、ないし完全に対する不完全という意味にもなった。

見菟原處女慕歌一首

葦の屋の菟名負處女の 八年兒の片生ひの時ゆ 小放の髪
たくまでに ……

右〔五首〕高橋連蟲麻呂歌集中出

（巻九—一八〇九）

に見る「片生ひ」は、子どもが成長過程にあつて、身長や歯など、まだ完全な大人になっていないことを表す語である。平安朝に用いられた「かたは」「かたほ」「かたそば」などは、その

陳防人悲別之情歌

わがかどの可多夜麻つばきまことなれわが手ふれなな土に
落ちむかも

右一首荏原郡上丁物部廣足

(卷二十一—四四—一八)

上代に以上の用例を見る「片岡」(右引、前二例)「片山」(後五例)は、「片岡山」(第一例)ともいうように、類義語と見なしてよいであろうが、それがどのような地形・地勢を表わすものであるのかについては、諸説あって判然としない。

かたやま 一方に傾斜面を見せている山。または一方が山で他方が開けている地形の、山の側をいう。

かたをか 一方に裾を長くひいてなだらかに傾斜した丘。また孤立した丘ともいう。

かたやま 片側が山になっている所。山の片側。また、人里離れたへんびな山。

かたをか 片一方に低く裾を引いた丘。また、丘の片側。一説に孤立した丘とも。

(小学館古語大辞典)

などが通行辞書の記述であるが、いずれも「また」云々と重複した説明になっており、不鮮明である。要するに、古く倭訓栞のいう

偏高曰阿丘とみゆ、前高後下曰旄丘と見えたる是也ともいへり

(「かたをか」の項)

における「旄丘」、すなわち半分が高く半分が低くなっているような地形を考えているのであろうが、そのような地形がわが

国に顕著に見られたであろうか。右引「片岡山」は、現在の奈良県北葛城郡王寺町片岡山達磨寺付近とされている(大和名所圖會)が、その周辺の山を実際に見てもごく普通の丘陵であり、格別片方に偏した地勢になっているわけではない。

そして、かりに「片岡」「片山」がそのような特殊な地形を表わす語であったとしても、右引諸歌において、何故に詠み込まれ、歌中でどのような意味を担うものであったのか、という根本的な疑問がなお解きがたく残るのである。

磐姫皇后思天皇御作歌四首之一

かくばかり戀つあらずは高山の磐根しまきて死なましもの

(卷二—八五、相聞)

高山に高部さ渡り高々にあが待つ君を待ち出でむかも

(卷十一—二八〇四、寄物陳思)

笠女郎贈大伴宿弥家持歌三首之一

奥山の磐本菅を根深めて結びし情忘れかねつも

(卷三—三九七、譬喩歌)

奥山の木葉隠りて行水の音聞きしより常忘らえず

(卷十一—二七一、寄物陳思)

などにおいて、単なる「山」ではなく、「高山」ないし「奥山」という語が用いられたのは、一首の中で、それらがぬきざしならぬ意味を表出しえたからである。「高山」の、天空に近い山の義、「奥山」の深山の幽邃の義、いずれも歌の心によく響くものであったことが了解されよう。しかるに、「片岡」「片山」に関しては、歌の中における治定句としての必然性が見出しがたいのである。冒頭所引推古紀歌謡や乞食者詠などを中心に、天皇陵名その他の史実にもとづき「片山」「片岡」を固有名詞

「片岡」「片山」「交野」について

堀 勝 博

一 はじめに

「片岡」「片山」は、全国に数多く分布する歴史地名であるが、元来は「岡」「山」の何らかの性質を限定した普通名詞であったと考えられる。従来、その意味について、いくつかの説が立てられているが、定説化したものがない。小稿は、「片岡」「片山」をまずは普通名詞としてとらえ、その原義について再検討し、新たな解釈を試みるとともに、関連する語「交野」についても考察しようとするものである。

二 「片岡」「片山」の用例

冬十二月庚午朔日、皇太子片岡に遊行す。時に飢者、道の垂に臥せり。仍りて姓名を問ひたまふ。而るに言さず。皇太子視して飲食を與ひ、即ち衣裳を脱ぎたまひて、飢者に覆ひて言はく、「安く臥せよ」と。則ち歌よみして曰はく、
しなてる片岡山に 飯に飢て臥せる その旅人あはれ
親なしに汝生りけめや 刺竹の君はやなき 飯に飢て
臥せる その旅人あはれ

(推古紀—二十一年十二月)

詠岳

片岡の此向峯に稚蒔かば今年の夏の陰に比らむか

(万葉集—卷七—一〇九九、雜詠)
白髮天皇二年冬十一月、播磨國司山部連先祖伊豫來目部小楯、赤石郡にして親ら新嘗の供物を辨ふ。一云、郡縣を巡行きて、田租を取斂むと。……

……吾子等 脚日本此傍山 牡鹿之角擧而吾儂者 旨酒餌香市不以直買……

(顯宗紀—即位前紀—室壽詞)

春雜歌

子らが名に關けの宜しき朝妻の片山、きしに霞たなびく

(同—卷十一—一八一八)

悲別歌

あしひきの片山、雉立ち往かむ君に後れてうつしけめやも

(同—卷十二—三二二〇)

乞食者詠二首—ノ第一首

……八重疊平群の山に 四月と五月の間に 藥獵り仕ふる
時に あしひきの此の片山に 二つ立ついちひが本に 梓弓八つたはさみ……

同第二首

……あしひきの此の片山の もむにれを五百枝はぎ垂り
天光るや日のけに干し……

(同—卷十六—三八八—六)